メンタルヘルス通信

<第63号>
２０１８年１月５日
香川県教育委員会事務局
健　康　福　利　課

ケース会による連携

児童自立支援施設で保護者向けに講演をした。保護者の不安の中に、施設退園後の中学校の受け入れがある。そこで、A君のケースを通して施設と中学校との連携を紹介した。尚、ケースを特定されないために、事実関係に変更を加えた。

A君は小１のころから万引きが始まり、その都度警察や児童相談所から指導を受けた。高学年になると先生への暴言、同級生とのけんか、教室を飛び出すなどの問題行動を繰り返した。知能は普通域だが学力は低く、小６になっても九九ができない。ADHDの診断も受けた。両親はA君が３歳のころ離婚。母親が引き取ったが、ネグレクト状態。児童自立支援施設入所案が浮上。母親は猛反対した。児童相談所と私は、高校進学を希望する母親に基礎学力をつけるには施設がいいと説得。母親も渋々ながら同意した。中学校入学直前に入所した。

A君の生活が一変した。朝早く起きて規則正しい生活。マンツーマン指導。短期間で九九を覚えた。担当の先生はゲームべったりだったA君を運動場に連れ出し、野球を教えた。母親は毎月面会に来るようになった。学校と違い、ほめてくれることが増えたからだ。施設内では一番年下のA君は先輩からもかわいがられた。もちろん、寮生活のルールを破ることもあり、その都度厳しく注意を受けた。順風満帆とは言えなかったが、約１年後にはかなりの基礎学力と体力が身についた。何よりも笑顔が戻った。担当の先生との信頼関係ができてきた。大人への見方も変わってきた。

中２から出身中学へ復帰した。中学校と母親は不安と期待が交錯した。しかし、一番不安だったのはA君本人だったかもしれない。そこで毎月１回ケース会を開くことにした。出席者はA君と母親。中学校からは担任、学年主任、生徒指導、校長、教頭。関係機関からは児童自立支援施設、児童相談所、子育て支援課、私が参加した。毎回、出席者はそれぞれのかかわりを報告し、情報を共有化した。その後A君と母親が加わり、学校生活と家庭の出来事を話した。特に担任はA君の課題も隠さずに指摘し、対策を全員で協議した。

このケース会は卒業までの約２年間続いた。A君は問題行動もほとんどなくなり、高校に合格。何がA君を変えたのか。児童自立支援施設が全力でA君にかかわり、中学校がしっかりと引き継いだ。施設内で頑張っていた生徒が中学校で元の状態に戻ったケースを今まで数多く見てきた。中学校が施設経験のある生徒の受け入れに難色を示すことも少なくない。しかし、この中学校の先生方は違っていた。何としてもA君を再生するとの意気込みがみなぎっていた。さらに関係機関が学校をサポートしたことも見逃せない。ケース会メンバーはA君の監視役ではなく、応援団に徹した。ケース会は連携の大切さを改めて教えてくれたと同時に各機関の信頼を深めた。この先、A君は乗り越えなければならない課題が山積しているが、応援団のひとりとして見守っていきたい。

臨床心理士　　廣田邦義